

哀歌3章21-24節 「絶望の中の希望」

1A 待ち望むエレミヤ 21

2A 主の慈しみ深さ 22-24

1B 滅び失せない恵み

2B 尽きない憐れみ

3B 偉大な真実

4B 主という分け前

本文

哀歌 3 章 21 節を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、哀歌 2 章まで来て、今日の午後、3 章から 5 章までを学びます。今朝は、3 章 21-24 節に注目します。「21 私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。22 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。24 主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」

今朝の説教の題名を、「絶望の中の希望」としています。エレミヤが絶望の淵にいました。エルサレムがバビロンによって滅ぼされているのを目の当たりにしました。王宮や家々が火で焼かれ、多くの人々が飢餓で倒れました。神殿の聖所の中にまで入っていき、異教徒によって汚されました。そして多くの者たちが青銅の足かせにつながれて、バビロンに連れて行かれました。かつて、周囲の国々から女王のようにして見上げられ、あがめられた栄華に満ち、繁栄の中で祭りに集うエルサレムの町は、人々の姿もなく廃墟と化し、城門は荒れていました。

エレミヤは、これらのことが主によって行なわれたものであることを知っていました。彼らが生ける神を捨てて、偶像に頼り、貪りによって弱い者たちを虐げていったため、主がバビロンを裁きの器として用いられたのです。そのことを約 40 年間、行なってきた結果のことです。しかしエレミヤは、同胞の民に対する愛が変わっていませんでした。主から注がれる真実な愛が、彼をいつもユダヤ人への預言へと突き動かしていました。そして、バビロンによって破壊される姿を彼は見ていて、決して他人事にはできなかったのです。自分を迫害した彼らですが、いや彼らが滅びるのは見るに堪えなかったこと、まるで自分自身が裁かれるようにして、彼はこの哀歌を歌っています。

哀歌 1 章 12 節において、まるで自分がエルサレムになったかのように彼は語り始めました。「道行くみなの人よ。よく見よ。主が燃える怒りの日に私を悩まし、私をひどいめに会わされた。このような痛みがほかにあるかどうかを。」そしてエレミヤは、それを自分のことのようにして受けとめてしまったがゆえに、3 章では、心を悩ませました。「1 私は主の激しい怒りのむちを受けて悩みに会った者。」そして、自分がいかに暗闇の中に陥ってしまったかを話しています。そのように気落ちして

しまったエレミヤが、なんとその絶望的な状況の中で、主にあつて希望を見いだしたのが、今、読んだ箇所であります。

1A 待ち望むエレミヤ 21

エレミヤの姿は、多かれ少なかれ、私たちキリスト者が通っているところであります。私たちはこの世のものではないのですが、この世の中に生かされています。この世から聖め別たれています。この世の中に生き、光となるように召されています。神と人との間に立つ人を、仲介者を祭司と言いますが、主は、キリスト者はみな神に対する祭司であると呼んでおられます。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。(1ペテロ 2:9)」

私たちは、この世に罪や不正が多くあるのを見ます。それに目を向けることによって、自分の心が気落ちします。なぜなら、それら罪や不正があれば、必ず神が裁かれることを知っているからです。けれども、私たちは神に対する祭司です。この世で起こっていることを見ないようにして、神の民の間だけで楽しい時を過ごそうとは思っていません。フランス革命が起こる前のことですが、農民が主食として食べるパンに事欠いている時に、「ケーキを食べればいいじゃない」と言ったと言われるマリーアントワネットがいます。彼女が貧しくなっている人々に目を向けないために、その感覚がずれてしまっていたのと同じように、私たちは感覚をずらしたくありません。主は、「人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うために来たのです。(ルカ 9:56)」と言われました。私たちは、罪多き世にキリストのゆえに触れていたいと願うのです。

しかし、その世は神によって裁かれることを知っています。そこにいる人々に自分が届けばそれだけ、自分自身が痛くなっていきます。苦しくなっていきます。そして、自分自身がこの世に対してどれだけのことができるのか、と思い、自分の無力さを思います。自分のほうには、何もできないことが分かります。けれども、次にどこに進めば良いかもわかりません。主に従っているつもりなのに、主ご自身がそこに対する回答を持っていないように見えます。それで八方ふさがりになって、落ち込んでしまうのです。

しかしエレミヤは言いました。「**21 私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。**」このことは、私は初め、何のことが分かりませんでした。これら落ち込んでしまうことを思い返して、「けれども、私は主を待ち望む」と言っているのであれば、理解できます。けれども、「**それゆえ、私は待ち望む**」と言っているのです。全く矛盾しているように聞こえます。

エレミヤは一つのこと気づいたのです。これらの悲惨な状況は、すべて「主が行なわれていた」ことに気づきました。主が、激しい怒りの鞭を自分の向けている、と言っていました。そしてずっと、「主が、これこれを行なわれた」と言われているのです。これらの悲惨は、主の支配の外にあるのではなく、力強い神の御手が置かれており、まさしく神の主権の中で起こったことです。ならば、主がここからご自分の栄光のために何かを行なわれるのだ、ということです。主が事を始められたの

だから、主がそれを成し遂げてくださるのです。初めに事を行なわれた方が、責任をもってそれを完成させてくださるのです。このことに気づいたのです。だから、エレミヤは、「**それゆえ、私は待ち望む**」と言いました。

25 節を見てください、「主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。」とあります。このような絶望的な状況の中で、主を待ち望むことができるのは、主の慈しみ深さを知っているからです。ここの「慈しみ深い」という言葉は、トブです。「良い」という意味であり、神の本質そのものであります。このトブの言葉が使われた初めは、天地創造の時です。「神はその光をよしと見られた。(1:4)」主が一日ずつ造られた時に、「よしと見られた」と言われて、それで全てを造られた時に、「見よ。それは非常によかった。(1:31)」と言われました。つまり、この慈しみ深さには、天地創造の時の神の支配があります。つまり、回復への芽があり、新しい創造が含まれています。

2A 主の慈しみ深さ 22-24

1B 滅び失せない恵み

エレミヤが気づいたのは、一つ目、「**22 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。**」であります。私はこれだけ主によって打たれた、と呟いているのですが、そうやって呟いている自分自身がいるのです。つまり、滅び失せていません。エルサレムが、その破壊を嘆いているのですが、その嘆いていることができるのは、滅んでいないからに他なりません。そこに、主の恵みがあるとといいます。

ダニエル書には、バビロンの王ネブカデネザル自身が、エルサレムに対するのと同じような取り扱ひを受けた箇所が出てきます。彼は夢を見ました。それは、「大きく生長した木」でありました。非常に高くなった時に、御使いが来て、「その木を切り倒せ。」との命令が来ます。そして根株だけになりました。この夢は、ネブカデネザル自身を表していました。彼がバビロンの栄華を自賛して、自分の権力にとって、自分の威光を輝かすために建てたものではないか。」と言った時、その時に天からの声があり、彼は理性が取られて、獣のようになりました。七つの時、おそらく七年でしょうが、その後には彼に理性が戻りました。彼は、天の神をその後で賛美しますが、根株があった、滅び失せていなかったのです。

そして、私たちの主イエスご自身が、メシヤとして「根株から出た若枝」と呼ばれます。「イザヤ 11:1 エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」イエス様も根株から出てこられました。イスラエルが、北イスラエルはアッシリヤに、南ユダはバビロンに捕え移され、一部は帰還しましたが、そこはペルシヤの支配でした。そしてギリシヤの支配を受け、激しい迫害を受けました。そして、ローマが来て、ヘロデも来て、それで彼らはダビデの家による王政なんていうものとは程遠く、その子孫は誰も知らない村ナザレに住んでいたのです。そこに生まれたのが、イエス様です。

したがって、主は試練の中から既に、恵みの働きを行なわれています。パウロは宣教の働きで、このように自分たちを形容しました。「2コリント 4:7-9 私たちは、この宝を、土の器の中に入れてい
るのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明
らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途
方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはあり
ません。倒されますが、滅びません。」このように、倒れているようで生きています。

そして、ここの「主の恵み」は、ヘセド(חֶסֶד)というヘブル語です。契約に基づく真実な愛です。ど
んなことがあっても、それでもご自身が約束されたように愛することです。イスラエルに対して、主
は永遠の愛の契約を結んでいました。ですから、ネブカデネザルのように根株のようになってしま
っても、そこにキリストがおられます。主ご自身も、根株のようなところから生えた若枝です。

2B 尽きない憐れみ

そして次に、「**主のあわれみは尽きないからだ。**」と言っています。この「憐れみ」のヘブル語の
元々の意味は、「母親の胎」です。つまり、母親が自分の胎にいる子を育てているような、そういう
優しさを意味します。イエス様は、そのような方でした。「マタイ 9:35-36 それから、イエスは、すべ
ての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいを直
された。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思
われた。」主イエス様が、弱り果てていた羊のように可哀想に思われました。エルサレムが破壊さ
れて、その僅かに残された民を見て、イエス様が群衆を見てそうであったように、その憐れみは尽
きぬことなく注がれていたのです。

ここで大事なことは、主はご自分が御怒りを示している時でさえ、憐れみの泉は湧いているという
ことです。主が怒りを注いでおられても、そこに怒りを注がない理由、あるいは軽減する理由が見
つかりさえすれば、すぐにそのことを行なわれる要素があります。ローマ 9 章 22 節で、エジプトの
パロについて、次のようなことがあります。「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせよ
うと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださった
としたら、どうでしょうか。」主がパロに怒りを示しておられても、パロは滅ぼされていませんでした。
彼は主に反抗しているのですから、そのまま滅ぼし尽くされてもおかしくなかったのです。けれども、
十にまで渡る災いによって、いつでも悔い改めることができたはずなのです。大患難においても、
その通りです。「黙示 16:9 こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これら
の災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめること
をしなかった。」炎熱によって焼かれているのですが、それでも生きています。ですから、神は一氣
に滅ぼし尽くさないで、彼らが悔い改めて滅びないことを願っておられるのです。

彼らは悔い改めないのですが、神の憐れみは尽きることがないのです。「ヤコブ 2:13b あわれ
みは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」私たちは、主の慈しみを信じて、懲らしめ、訓練の中で

も主の憐れみに預かることができます。

3B 偉大な真実

「23 それは朝ごとに新しい。」と次にエレミヤは言っています。憐れみは尽きることがないので、尽きないだけでなく朝毎に新しくされているのです。ですから、目覚めて間もなくしてから、主の憐れみに触れることは大切です。パウロは、「内なる人は日々新たにされています。(2コリント 4:16)」と言いましたが、それは朝毎に新しくされている神の憐れみに触れることによって、であります。

詩篇には、朝に主との時間を過ごしているダビデの姿を見ることができます。「5:3 主よ。朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします。」そして詩篇交読の箇所にはこうありました。「143:8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。」神の恵みが朝にあります。

私が、カルバリーチャペルの牧師たちの会議に出た時のことです。部屋には、何人もの牧師たちがいましたが、朝起きると、誰もいませんでした。そうです、一人一人が朝早く起きて、どこか静かなところに行って、主との時間を過ごしていたのです。主の憐れみが朝ごとに新しくされているのですから、当然と言えば当然です。

そして、「あなたの真実は力強い。」とエレミヤは言っています。エレミヤは、神が恵み深い方、憐れみに尽きない方であることを知っており、そして、力強い真実を持っておられる方であることを知っていました。真実というのは、裏切らないことです。一度言ったことは、必ず成し遂げることです。主は、ご自分が語られたことについて、何一つそれを行なわないということはありませんでした。

アブラハムに主は語られ、そのの地が彼の子孫のものになると約束されました。そして、モーセの時代に彼らはエジプトを出ました。それから、ヨシュアが率いるイスラエルがカナンの地に入りました。そして住民たちと戦いました。そして、割り当て地をそれぞれが受けます。そこにこう書いてあります。「ヨシュア 21:45 主がイスラエル之家に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。」何一つ、主が語られた良いことは変わらず、実現したのです。そして、良いことだけではありません。

主は、裁かれる時にも、その真実を御言葉によって示されます。「ローマ 3:3-4 では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるでしょうか。絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。」主が約束しておられた地から彼らが

引き抜かれたことさえ、それは神の不真実を示しているのではなく、むしろ真実を示しているのです。主が、彼らを引き抜くと言われたのですから、その通りになったのです。

そして、もちろん主は、ご自分の性質に反することを行なわれたい、真実な方でありたい。モーセの律法の最後は申命記ですが、そこには主が必ず、ご自分に聞き従わなければ、地から引き抜かれて、異邦人の国々で物笑いとなると書かれています。私たちイスラエル旅行に行った者たちは、ユダヤ人の家庭での安息日の夕食に招かれました。そして、その息子さんと後日、会ってそのビデオをお見せすることができました。その後、質問コーナーの時間を持ったのですが、一人が、「こんなにイスラエルは歴史の中でたくさんの苦しみを受けていて、苦々しくなることはないのか？」ということでした。そこでそのイスラエル人の方は答えました。「いいえ、私たちは選ばれた民であり、自分たちで選んだのではない。苦みは持っていない、神からの試練だから。」まるで、申命記にある、神の慈しみと厳しさの預言を聞いているようでした。このように、主はまるで申命記にある神の慈しみと厳しさの預言を聞いているようでした。

4B 主という分け前

「24 主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。」と言っています。エルサレムは破壊されました。ユダヤ人は捕え移されています。何もかも無くなってしまいました。けれども、ありました。そう、主ご自身です。主がおられたら、それが自分の受ける分、相続であります。私たちの本来の務めは、祭司であることを先に学びました。祭司は、私たちが世において、聖所の中にはいり、主のご臨在と栄光に見えるということが務めであります。何も無くなっても、主がおられます。それで十分に足るのです。

そして、「それゆえ、私は主を待ち望む。」と言いました。私たちは、望むことによって救われている。望みがない時に、私たちは霊的に生きることができません。息を止めているのは、一・二分できるかもしれませんが、希望がないのは、もう五秒と持たないと誰かが言っていました。ですから、希望を置くのですが、主を待ち望みます。日本語訳はすばらしく、希望には、必ず忍耐が伴っていることを教えていますね。「ヘブル 10:36-37 あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。」忍耐をもって待ちます。

そして、ユダヤ人の残された者は、虐げの中でそれでも希望をもって生きることができました。主はすでに良い事を始められておられ、それがたとい酷いことが起こって間もなくしているところに、すでに存在していました。私たちが、ただ気づかないです。